

旧母里太兵衛邸長屋門の保存修理工事について

2015 年 5 月 30 日
現地説明会資料

福岡市文化財部大規模史跡整備推進課 TEL 092-711-4784

1. 建物概要

文化財指定 : 福岡県指定(昭和 31 年 4 月)
建築年代 : 江戸(構造形式より 19 世紀前半か)
構造及び型式 : 長屋門ⁱ、木造平屋建て、入母屋造ⁱⁱ、本瓦葺
規模 : 桁行 21.06m、梁間 4.0m、建築面積 84.24 m²
改修履歴 : 昭和 40 年移築 昭和 57 年屋根および壁改修

2. 建物の来歴と修理方針

この建物は福岡市内では数少ない武家屋敷長屋門です。かつては旧母里邸跡(中央区天神 2 丁目、現野村證券(株)福岡支店)にありましたが、昭和 27 年に解体され、昭和 40 年に現在地に移築されました。昭和 57 年に屋根の葺替え等を行いました。移築から約 50 年が経過し軸部や土台の腐朽が進んだため、保存修理工事を行いました。修理は現況復旧を原則とし、屋根、小屋組みⁱⁱⁱ、及び桁の一部については解体後、現況復旧しました。柱や土台は家揚げを行った上で、柱の根継ぎや土台の取替え等を行いました。

3. 工事の内容

平成 26 年 10 月 15 日から平成 27 年 4 月 30 日まで行いました。主な工事の内容は以下の通りです。

木工事

既存材の再利用を原則とし、劣化が著しい箇所は部材の取替えや補修を行いました。劣化の状況としては、門部廻りの軒桁^{iv}や棧梁^vの垂れ下がり、各部材(門柱、柱、土台、軒桁、大梁^{vi}等)の腐朽、棟木や母屋^{vii}が水平でないこと等が確認されました。

瓦工事

瓦は昭和初期の瓦(産地不明)、淡路瓦、美濃瓦(昭和 56・57 年改修時)の 3 種類が葺かれており、当初の瓦材は確認できませんでした。瓦の質や状態については美濃瓦、昭和初期の瓦は良好でしたが、淡路瓦の質がよくなかったため、軒丸瓦等、最小限の再利用としました。既存瓦は東側及び南妻側に優先的に葺くことにしました。また、屋根荷重を軽減し、建物の構造をより安定とするため、葺き方をべた葺きから筋葺き^{viii}に変更しました。入り口庇からは昭和 40 年の復元工事を示す瓦^{ix}が見つっています。

防蟻工事

土台から柱、小屋組みに至るまでシロアリによる蟻害が確認され、特に公園に面し、樹木が繁茂して

i 近世の大名・旗本・家老などの屋敷に見られる門形式の一つ。家臣の居所としての長屋と門が結合したもの。

ii 上部を切妻造りの形式にし、その四方に庇屋根を付けた形式の屋根をもつ建物の形式。

iii 小屋は屋根と天井に囲まれた部分をいい、この構造を形成する構造体を小屋組みという。

iv 建物の外壁の頂部で軒の下に渡される横架材。P3 図参照。

v 櫓門や長屋門において冠木の上に架けて、冠木と直角方向に半間ごとに渡してある梁。天井板を受ける。P3 図参照。

vi 柱に直接結合されている構造上主要な梁で、耐震上主要な構造部材である。P3 図参照。

vii 小屋組みにおいて棟あるいは軒桁に並行して垂木または裏板を支える部材。P3 図参照。

viii 瓦の谷に当たる部分にのみ葺き土を置く瓦の葺き方。全面ベタに置いて葺く土葺きに比べ屋根重量が軽くなる。

ix 復元工事は昭和 39 年 10 月 20 日～40 年 3 月 31 日にかけて行われ、瓦には昭和 39 年の年号が記されている。

いる西側は顕著でした。そこで本工事では建物全体、建物内地盤、建物周囲の防蟻処理を行いました。土台や柱などの新規材で 5 m 以下のものは薬剤を含浸させる方法で防蟻処理をしました。5 m 以上の材や既存材、継ぎ手部分等については吹付処理、もしくは刷毛塗りとしました。

建具工事

門扉に取り付けられた金物（乳金物^x、八双金物^{xi}、鉾金物、菊の釘隠し、肘壺金^{xii}、貫抜金物）は当初のものと考えられます。門扉の開閉を調整し、乳金物、八双金物の留め釘、菊の釘隠しなど欠失しているものについては新規金物を取り付けました。

4. 当初材について

当初材は可能な限り再利用に努めましたが、再利用に耐えられなかった以下の部材は防蟻処理し、長屋門南室の内部に保存することとしました。

門廻り

門柱は当初材と考えられます。門柱柱根に巻かれた銅板を撤去したところ、肘壺金留め具箇所^にに乳金物が付いていた痕が確認できたため、当初は銅板を巻いておらず、門柱上部同様に乳金物が飾られていたと考えられます。

また、蹴放^{xiii}にも欠き込み^{xiv}や杢穴^{xv}を埋木した痕が確認できることから、昭和 40 年移築時に別の当初材を補修し、蹴放として転用したものと考えられます。

大梁

門部西側の軒桁を支えるために大梁^{おおはり}が掛けられています。柱の杢穴が斜めに掘られていることから、昭和 40 年移築時に材がねじれた状態で組まれたと考えられます。また、梁上面に杢穴が確認できることから、当初は大梁に束^{つか}^{xvi}を立て、軒桁を支える構造であった可能性も考えられます。

破風板

破風板^{xvii}は当初材と考えられます。破風板には眉欠き^{まゆかき}^{xviii}が彫られており、表面には鋸目等が確認できます。表面の風化具合から、当初は眉欠きの形状に合わせて漆喰が塗られていた可能性も考えられます。眉欠きの形状は下之橋御門の破風と類似しています。

参考文献

株式会社彰国社編『建築大辞典＜縮刷版＞』（昭和 51 年 株式会社彰国社）

渋谷五郎・長尾勝馬原著、妻木靖延著『新訂 日本建築』（平成 21 年 学芸出版社）

x 半球形の座金の先に短い円筒形の金物が付いている乳房に似ている化粧金具。門扉の釘隠しに主として用いられる。

xi 建物の扉の軸側を U 字状に挟んで水平に取り付ける鉄製の化粧金物で、先端の繰形の中央部が魚尾状に入込んでいるもの。

xii 折釘状の肘金物と軸孔を設けた壺金物を組み合わせて丁番と同様の機能を持たせた金物。門扉などに用いられる。

xiii 門柱の間に会って門戸または通り口の下に横たわる角材（^{しきみ}闕）のうち、内外の区画をつけるための取り外しのできるものをいう。P3 図参照。

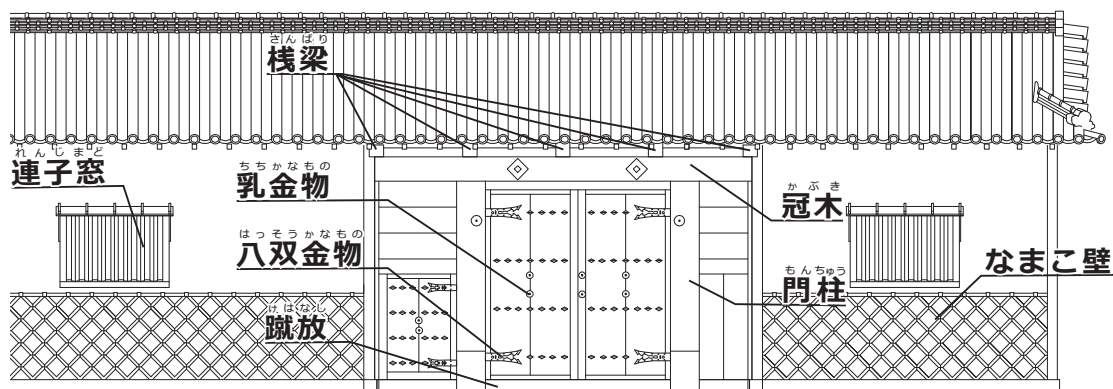
xiv 木材の一部を他材と組み合わせるために他材の幅の分だけ欠き取ること。

xv 2 部材を接合するために 1 材の端に造り出した突起を杢^{ほぞ}といい、他材に設けたこの突起を受ける穴を杢穴^{ほぞあな}という。

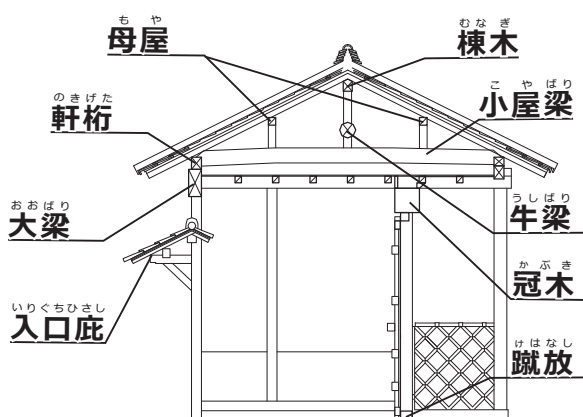
xvi 短い垂直材の総称。古くは束柱と称した。束は「束の間」の束で短いの意味。

xvii 屋根の妻側において山形に取り付けられた板。P3 図参照。

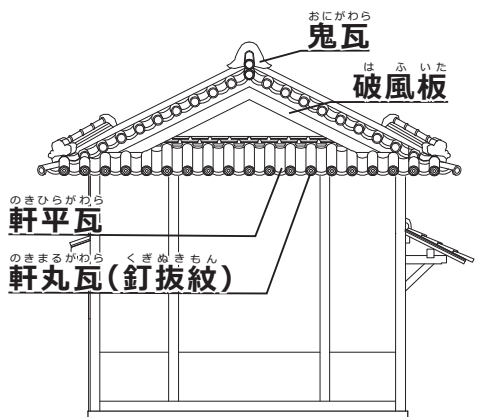
xviii 破風板の下方端の仕上げを凹んで削って装飾的に作ったもの。



長屋門東面【門部】

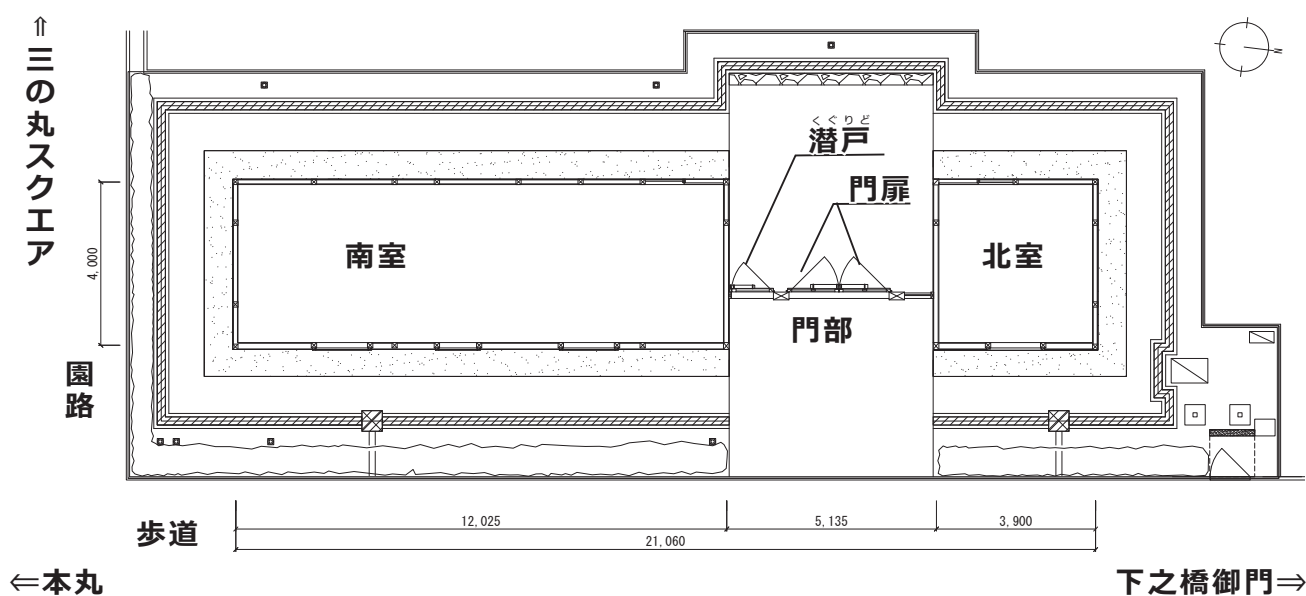


門部断面【南から】



長屋門北面

旧母里太兵衛邸長屋門 各部名称



旧母里太兵衛邸長屋門 平面図



竣工前 門
屋根の中央部が下がっていました



竣工後 門
中央部の下がり修復されました



解体時 小屋組み
棟木・母屋の水平が取れていません



解体時 隅木
材の一部は腐朽が進行していました



解体時 大梁
当初材であり、蟻害が著しかった



解体時 牛梁
小屋組みにも蟻害が及んでいました



軒丸瓦 産地不明
途中で継ぎ目が確認できました



軒丸瓦 淡路
質が良くありませんでした



軒丸瓦 美濃
他に比べてやや短いものでした



木工事 土台取り替え
家を持ち上げ蟻害が確認された土台はすべて取り替えました



木工事 門柱根継ぎ
柱根の腐朽が著しかったため、家を持ち上げて腐朽部を切除し新材を継ぎ足しました



瓦工事 筋葺き
屋根の重量を軽減するため、瓦の谷部中央にのみ土を葺く筋葺きに変更しました